



小田実全集（小説 第32巻）

XYZ



講談社  
小田実全集



*Makoto Oda*



目次

その一	アシヤのイノシシ	10
その二	Kー通りのまつ白い卓子	23
その三	<small>グレートホールドーム</small> 大会場の円蓋の雨	35
その四	<small>レインマン</small> 雨男と天使	49
その五	XYZ	62
その六	あとがない	75
その七	悲鳴の練習	89
その八	拍手	103
その九	兵士	116
その十	行進	130
その十一	天二代リテ不義ヲ討ツ	144
その十二	<small>ジス・グレート・カントリー</small> この偉大な国	158

その十三	ソクラテス伍長	172
その十四	市民諸君	186
その十五	指先	201
その十六	世のなかのことは……	216
その十七	金波銀波	231
その十八	あなたのいくさとわたいのいくさ	246
その十九	殺す者は殺される	261
その二十	死体	275
その二十一	殺戮	290
その二十二	知恵者	305
その二十三	臭い	320
その二十四	アプロディテ	335
その二十五	アテナイ人、あるいはあつぱれ男シモニデス	350
その二十六	芝居	364

その二十七 どつちがしんどいか

その二十八 才覚

その二十九 吉事

その三十 差し引き勘定

その三十一 海タラッタの自由

その三十二 格が低い

その三十三 コ・ロ・ス・ナ童子

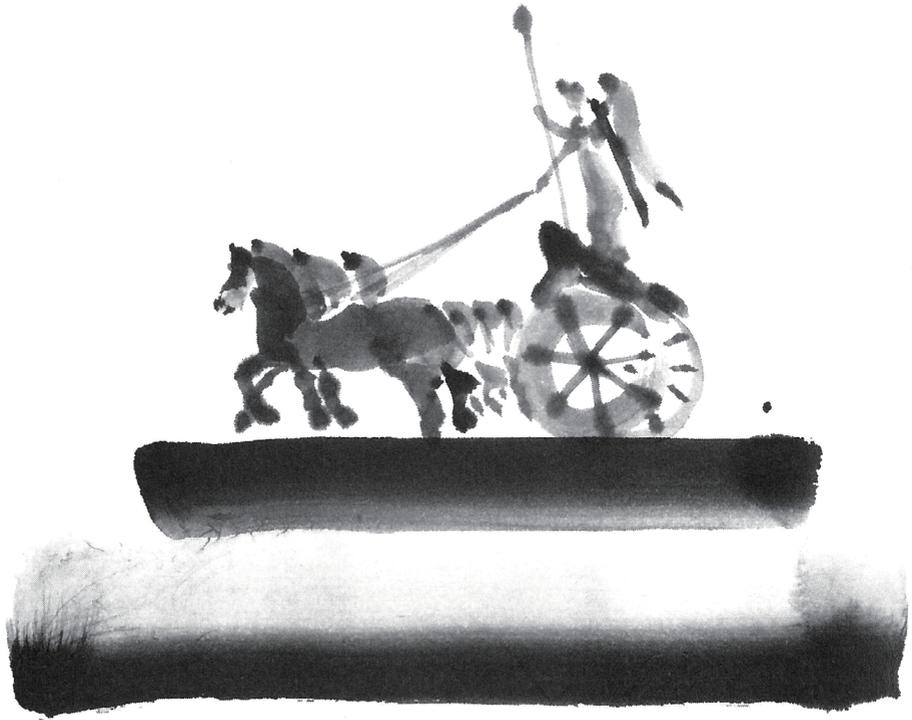
その三十四 廃墟

その終章 クソと泥・あるいは、消滅

挿画  
装丁

玄ヒヨンスン順恵  
北本裕章

X  
Y  
Z



X 文字。第一番目の未知量

Y 文字。第二番目の未知量

Z 文字。第三番目の未知量

(コンサイス簡約オックスフォード辞典)

## その一 アシヤのイノシシ

大隠は市に隠る

アシヤにイノシシが出たというので出かけることにした。

こういうときはエモノをもつて行くものだ。フライパンにしようかと思つさに考えたのは、このあいだ、アライさんがフライパンで女房の頭をぶん殴つたという話を聞いていたからだ。何んでまたそんな仕儀に立ち至つたかは聞いていないが、とにかく手もとのフライパンで古女房の頭をぶん殴つてしまつた。酔つていたので手もとが狂つた。あれでよかつたのです。おかげさまで女房を殺さずにすみました。何がおかげさまか知らぬが、アライさんはアツサリ言つてのけた。彼は生来おとなしい男だが、そういうことも虫も殺さぬ顔で言うのだ。殺していても、おかげさまで殺せました、と言うかも知れない。もつとも、古女房が怒り出して家出どころか離婚までも口にしたので、彼はタタミに手をつけて平あやまりにあやまつた。二度とこういうことはしません、とワビ状まで、ちょうど嫁ぎ先から孫を連れて家に帰つて来ていた娘のまえで書かされたそうである。

ともかくフライパンは面白くない。第一、相手が古女房ならぬイノシシ、野生のけものである。そんなエモノではラチがあかぬ。何んにしようかとあらためて見まわしてみると、部屋の隅に火繩銃が

立てかけてあるのが眼についた。いつの時代のものか知らぬが、タネガシマ伝来の先込め鉄砲である。坂口が頼みもしないのに、ダンナ、これは出物です、買つといて損はしませんで、という口上つきでこのあいだもつて来た。三田の奥の山中だったか、丹波の山ザルの住むササ山の先の村だったか、旧家の土蔵ひとつをまるごと買ったのだ。屋敷と土蔵をつぶして、イタリア式の明るい新居を建てる。このごろそういう馬鹿なことをするのがはやっていそうである。じじいが死んで若いのが継ぐのだと言うので、じじいはいくつで死んだのかと何気なく訊くと、六十四歳だと言う。何を言うておるのか、六十四歳かそこらで何がじじいだ、わしより十何歳も年下じゃないか、坂口さんよ、あんただだつてもう六十歳、今年は還暦だと言うていはつたばかりじゃないか、あんたもそれならレッキとしたじじいだ。そう言つてやると、そうですな、そういわれてみればわたしもレッキとしたじじいですかなと眼をしょぼつかせた。この骨トウ屋、これでもうわしのところに入り始めて五年になるが、たしかにこのごろめつきり年をとつてきた。そうして眼をしょぼつかせているのを見ると、たしかにじじいである。ほかに言いようがない。

その火縄銃、土蔵をまるごと買つて来たもののなかに入つていた。そう坂口は言う。どうしてそんなけつたいなものがそこにあつたのかナゾとしか言いようがないが、坂口が、これは出物です、と言う以上はそうなのだろう。一度、たしかに李朝ダンスの出物をもつてきた。これも土蔵買いの品だったが、これもまたどうしてそんなコーリア伝来の品がそこらのただの山奥にあつたのかナゾとしか言いようがないが、あれはたしかに出物であつた。うちにやつて来る人間がコーリア人まで入れて口々に、ええもの買いはりましたな、と言うから、たしかだろう。

さて、エモノは火縄銃ということにした。弾が出るはずもないが、ぶん殴るのには好適だ。八十余歳にしては元気がよすぎるなどと言わないでもらいたい。いまだにときどき朝立ちすることもあるのだ。そんなときには急場のことで他のまともな女子おなごもまにあわぬので仕方なしにバアさんを押し倒す。いつかあわやというときに孫が部屋に入って来た。おじいちゃん、おばあちゃんをいじめたらいかん。いじめているもんか、おまえも友だちととつくみあいてほたえるじゃろう。わしもほたえているんじゃない。そうか、ほたえているんか。孫は納得した顔になったが、いや、まったく納得していない顔であつたが、さすがにそこで息が切れて、沙汰やみになつた。べつに惜しいというほどの相手でもない。毎朝の木刀の素ぶり三十回、これは欠かしたことがない。いくさに赤紙にフィリップン沖合での轟沈漂流泳いで上陸飢えホーコウあげくのはての俘虜收容所復員船でのリンチ騒ぎ、闇市のかつぎ屋に長靴行商のボロ儲けに朝鮮特需に何んとか景氣のあとの倒産にその次の何んとか景氣で当てて始めたゴルフに建て売りの別荘に別荘の裏手の山の早起き登山会の幹事にバアの女にクラブの女に素人女に処女に人妻に未亡人に美女ブス名器粗器善女悪女天使悪魔いろいろあつての八十余歳である。いろいろあれば人間いやでも強くもなる。たかがイノシシの一頭や二頭、火縄銃でぶん殴つてぶちのめせないわけではない。火縄銃をとり上げてみた。ずつしりと重い。いい手ごたえである。素ぶりもやつてみた。一回、十回、三十回。おじいちゃん、何やつてるの。例の孫が顔を出した。また、ほたえに行くんですか。イノシシを殴るんじや。ぶちのめして持つて帰つて来る。シシ鍋にするんじや。あれはうまいし、あたたまる。それに精がつく。いっしょに来るか。

ダメだよ、ぼくは忙しいんだよ。今日は塾がある。それからプール。

プールって、おまえ、もう冬やないか。  
バカだな、おじいちゃん、ぼくの行くのは室内の温水プールだ。

しかし、捨てる神あらば、いや、孫あらば拾う孫あり、である。いよいよ新田のタクシーが来て、火縄銃をかついで出かけようとしたところで、次男のほうの孫がやって来た。長男のほうの孫がさつきの小学五年生だが、こちらは女子おなごでまだ幼稚園だ。幼稚園の「年長組」の六歳である。名前はミキ。どんな漢字を書くのかは忘れた。長男一家はわしとバアさんと同居。次男一家も近所に住んでいるので、しょっちゅう孫はやって来る。次男のほうの孫は二人いて、下のがミキ。

おじいちゃん、どこへ行くの、鉄砲かついだりして。

猟へ行く。イノシシをこれで……

(殴る)と言いかけたのをミキが、  
射つのね。

と引き継いだ。

わあ、おじいさん、猟師さんみたい。

ミキは喚声をあげた。

イノシシを射つんだ。

わしは調子に乗って言った。

ミキ、おじいさんがイノシシを射つところ、見たい。

わしは火縄銃をもち直して射つかまえをしてみせた。そうするとほんとうに火縄銃の銃口が火を噴くような感じがしたからふしぎだ。轟然一発。巨大なイノシシが額から血を噴き出させながら倒れる。ついで、さらにとどめの一発。

じゃあ、いつしよに来るか。

ミキ、行く。

そこで、勢ぞろいである。

わし、ミキ、車を持って来たKKタクシーの新田。それに坂口もやって来た。せつかく火縄銃を使うのだ。坂口を来させない術はない。あんたが持つて来て勝手に置いて行ったタネガシマを使うから見に来い、と電話で言つてやった。その電話でヒヨコヒヨコやつて来たのは、何を言われたのかよく判つていなかったにちがいない。判つていたら、何んのかのと言いわけをして来なかつただろう。これからアシヤまで出かけてイノシシを仕とめるのだ。大きなのをもつて帰つて肉屋にバラさせて、シシ鍋にするのだと言うと、えらいことになつたという顔になつた。ついにこの老人、気がちがつたにちがいない。えらいことにまき込まれた。まぎれもなくそういう顔であつた。わしははつきり言つてやった。いつしよに行かんのなら、あんたはこれからはもう丹波やら丹後やらの山奥から二束三文に買い叩いて買って来たガラクタはもうわしのところに持つて来んのだ。そう言つてやると、いつそう浮かぬ顔になつた。その顔で新田に目くばせを送つたが、当年とつて三十二歳の若僧運転手は取り合わない。三十二歳のくせにもう子供が五人いるというこの今どき珍しい男、キチガイじじいが何をや

らかすのか、単純に面白がっているのである。でないと、わざわざ、アシヤできつきイノシシに会いましたよ、客を送って行ったら、バツタリ、横の通りから出て来たのに会った。ええ、大きなやつでしたよ。しかも子連れでね、小さいのがあとからついて来たど電話をかけて来たしなかつたにちがいない。子連れはまずい、とわしが言い返すと、いいや、そういうときには仲間がまた二、三頭いるもんです。ぼくはこのあいだも言いましたけど、山育ちですやろ、シシ狩りもやったことあるからそんなことは判りますねん。じゃあ、いよいよ、シシ狩りに行くことにするか。あと二時間経ったら、車持って来てくれ。ぼくの車で行くんですか、とこれは少しびつくり声であつた。あたりまえじゃよ、この話伝えてくれたんはあんたじゃないかね。それにあんたはそれこそこのあいだ言うていはつた通り山育ちでシシ狩りもやったことあるんじやろ、老人は助けんといかん。ああそれから、日当も車の料金も割り増してタツプリアげる。最後のセリフがことのほかきいたのか、やって来たときにはニコ顔になつていた。キチガイ老人に半日お供をしてたつぷり稼げれば言うことはないだろう。それに自分だつてイノシシを追いまわして、遊べる、いや、日ごろのウツパンを思う存分はらせるのだ。自分で車のトランクからスパナを持ち出して来て、これで一発イノシシのミケンにぶちかましましやう、とふりまわした。

ミキはもちろんゴキゲンであつた。日ごろはまつたく冴えない、いいところなしのおばあちゃんやら自分の母親らに、やれ、ヨダレが落ちる、くさいおならばかりしているとさんざんバカにされているおじいちゃんがサツソウと火縄銃を肩にして出かけるのだ。その絵本でしか見たことがなかつたシシ狩りに自分も参加するのだ。ゴキゲンにならなかつたらふしぎだろう。坂口のおじいさんも行くの

よ。ミキは浮かぬ顔をつづける骨トウ屋に大人びた言い方で言った。行かないのなら、坂口のおじいさん、ミキ、もう友だちになってあげない。とどめの一撃を小さいのまでがけなげに準備していた。坂口の浮かぬ顔が、じじいばかりか孫まで狂いよつたか、と無言で言った。

アシヤにイノシシが出て来るようになったという話をしたのは新田である。温泉に入り九州へ行った帰り、ヒコーキで伊丹に着いて西宮のわが家までタクシーに乗った。その車の運転手が新田であった。お客さん、どこへ行つて来なごつたんですか、と先方から声をかけて来たのだから、無愛想この上なしが常つねのこのごろのタクシーの運転手としてはよくできておる。やつぱり田舎は田舎、九州の山奥からやつて来ただけある今どきめずらしい朴トツなどころがあると感じ入つたのは、あとでそんな話になつてからだ。

彼の質問に、九州に温泉に入りに行つて来たと言つたのをキツカケに話が始まつた。自分も九州ですもん、と他国の人間が真似たことがすぐ判る関西弁で言つたので、九州はどこや、ハカタか。そんな都会とちがいます、と彼の生まれの土地の名を口に出した。なんや、えらい山奥やな、イノシシが出るところやないか。まあ、そういうとこですなから始まつて、あと三十二歳という彼の年齢から、大阪のスナックのキャッシュエヤーをやつてた女と結婚して、いや、強引に結婚させられて今は子供がすでに五人、そろそろ打ちだめにせんとアカンのやけどヨメはんが言うこときいてくれへんに至るまで頼みもしないのにベラベラしゃべつたのを見ると、この男、生まれつきよほど話好きだと見える。何を言うておる、ヨメはんも好きやけどおまえさんも好きやということやないか、子供は墮ろしたら

すむ話やないかと当然のことを言うと、ヨメさん、何か知らんが宗教に凝っていて、その宗教のお宗旨によると、子供は墮ろせんようになってる。とにかくうちのヨメさん、気が強い上にもとキャツシエヤーやから勘定がこまかい。ほんまにキツイでつせ。仕事もキツイがうちへ帰つてもキツイ。お客さん、ぼくはいじめられていじめられて、どないしたらよろしいか。

まるで漫才であつたが、一抹の真実、哀感もこもっていないこともない。田舎へ帰つたらどうや、イノシシのいる山奥へな、そこでシシ狩りでもやるんだな。シシ狩りやれば、あんたのウツプンも晴れる。そうですね、それはいい考えですな、と新田は言いかけて（もうそのときまでにわしは彼の名前が「新田三郎」であることは彼の横の名札で知っていた）、そうですね、うちのヨメはん、ついで来てくれよるか。

そこから話は、アシヤにイノシシがこのごろ出るといふ話になつた。まさか、とわしはすぐ言い返したが、ほんとでつせ、と新田はにわかにな元氣が出た言い方で言つた。彼の会社の運転手で二、三人、アシヤの市内を運転して、邸宅のあいだの道をのそのそ歩いているイノシシどもに出会つたのだという。アシヤはアシヤでも、山の手のとびきりの金持どもが豪邸を建て並べてたくさん住んでるあたりだ。

アシヤは金持の住むところやないですか、ことに山の手の辺はね。新田は、何んでまた、と訊ねるわしに判りきつたことを言うという口調で応じた。そこらは残飯もいいのがフンダンにある。もうイノシシどもも山のなかで苦心してエサ探しをする必要はない。それにあそこには獵師はいないし、自分の家でシシ鍋をやつてのけるつもりでシシ狩りをする不敵な輩やからもいるはずもない。この二つの理

由あって、アシヤの背後にそびえ広がる六甲山系はおろか、さらにその後背地のそれこそ丹波、丹後の山奥からはるばるとイノシシが移動して来た。

あいつら、けしからんですよ。

新田の口調は憤慨したものになった。

何がけしからんのかね。

エサを探す努力はしよらんし、鉄砲に射たれんですむし、まるで三食ヒルネつき、これはいかん。

あなたのヨメさんのようにかね、とは言わなんだ。代りに、動物園のイノシシかつてそうやないかとまぜ返した。

あつちにはオリがありますかな。自由がない。アシヤのイノシシは、お客さん、自由はあるし、何んにも仕事はせんでええし、射たれもせんで、まったくのこわいもの知らず。

このごろ、ことにけしからんのは、この三食ヒルネつきの自由をいいことにして、アシヤのイノシシどもが屋敷の庭に入り込んで芝生をほじくり返したり花壇を台なしにしたり、あるいは、庭にほした洗濯物を泥まみれにしてしまったりすることである。ある家では庭に満艦飾にほした奥さんのパンティが根こそぎやられて、いざ下着泥棒の仕業かと思つたが、さにあらず、色とりどりパンティは芝生に散らばつてすべて無事、ただ何枚かが食い破られていたし、たいていに歯形がついていた。まあ、こういうエロ・イノシシの仕業などは笑つてすませられるが、この上、庭で遊ぶ赤ん坊に襲いかかりたりしてはことだ。サカリがつくと、お客さん、けものは気が立つてあぶない。

あれはつまりサカリがついたみたいなものだとわしがうなずく気持になったのは、わが家の三人のアシヤのイノシシどものことを考えたからだ。はやりの市民運動とやらのサカリがわが家のアシヤのイノシシどもにとりついて、それで三人しきりに気が立って、三人が三人とも、三食ヒルネつきの自由をいいことにゲンパツ阻止、ゲンパツ反対、いのちが大事、とはねまわっているのだ。それも、家のなかでわめきたてているのなら、それこそアシヤのイノシシのほんものがどこかの屋敷の芝生に入っていたはずらしいことでもまさに子供のお遊びだが、このごろは外へ出て行って叫び上げたりする。このあいだ、大阪へ行った帰り、電車を降りたら、駅前がいつになく人だかりして騒々しい。何をやっているのかと思ったら、女どもがゲンパツ反対の集会をやつていよるのだ。集会をやつてそのあとデモして歩くという趣向のものだったが、何気なしにのぞいてみると、いるわいるわ十人ほど並んだアシヤのイノシシの女ども、若いの年とつたの中途半端のなかにそれぞれひとりずつ、若いのが次男のヨメのキヌ枝、中年が長男のヨメのナオ子、そして年とつたバアさんイノシシが誰であろう、他ならぬわしの老妻のタズであったのだから、これはもうたまげるとは仕方がない。何んだ、てめえら、亭主がそれこそ会社で過労死せんばかりに懸命に働いておるあいだに何をひまにまかせてやつておるのかと一挙にハラを立てるあいだにミキの母親のキヌ枝が人の輪のまんなかに出て来てひときわかん高いキイキイ声で、みなさん、ご存知ですか、放射能汚染がひどくてもうわたしたちはこわくて何んの食べ物も食べられないときに来ているんです、わたしたちが今立ち上らなくては、まだ幼ないわたしたちの子供の生命はどうなるのですかとわめきたてた。いや、わめきたてたばかりではない。いつのまに來ていたのか、そばのミキを抱き上げながらさつきのセリフの最後を口に

出した。ミキはミキでニコニコしたと言いたいところだが、キリリと引きしまった細面の母親同様眉間に小ジワをよせてうれしい顔をする。

わが家の三人のアシヤのイノシシのなかでもっとも早くそうなったのは三人のなかでもっとも年下の、年若いゆえにはやりに弱いそのキヌ枝であった。チエルノビルとか何んとかで女子どもが日本おなごのあちこちで騒ぎ出したときだ。この伝染の病気、感染力が強く激しくて、はじめは、この子、何を言うておるのかと白い眼をむいていたナオ子、ついにはタズまでが懼ってしまった。いや、老いの一徹、タズのほうが今や激しきにおいて誰よりも立ちまざっているかも知れない。病気はゲンパツ反対からほかにも伝播して、あなた、もうゴルフなんかやめなさい、農薬汚染で日本は今たいへんなことになっているのでつせ、とバアさん、こわい顔で言う。アシヤのイノシシの実害はわしの場合はいくらいですむが、長男、次男、どちらもレッキとした一部上場の企業にいたのだ。つれあいがアシヤのイノシシになって暴れていては、どうにも始末がわるい。ことに長男、医者とはいえところもあるうに電力会社の病院で医長をしているのだ。なんとかうちのヨメはんに言うてくれませんか、とわしに頼む。アホめかせ、自分で言え、とわしはシツタするが、言うたら、家出しよりまずとまことに医長殿情けない。次男も事情同じだったが、お父さんかて、同じこととちがいますか、お父さんが言うたらお母さん出て行きはりますやろ、そやから黙っていはると次男はホコ先をわしに向けた。

西宮にはイノシシは出んかね。

新田のアシヤのイノシシの話が一段落したところでわしは言った。

もうすぐ車はわしの家に着く。

出ませんな。

新田は二べもなく答えた。

西宮も山の手は知りませんが、ここらは家がちよつとこまいですやろ。残飯の質も落ちるんとちがいますか。

五人の子持ちの若僧運転手はわざとらしくあたりを見まわしてから断言するように言った。

神戸から大阪にかけてアシヤは金持都市、つづく西宮は中流、さらにアマこと尼崎は労働者貧乏人のまちというぐあいに格が上がるのか下がるのか。うまい残飯しか食わんというグルメ・イノシシはそんなことも心得ていよるのか。

そやけど、うちにはイノシシがいるで。アシヤのイノシシが。

車を降りるだんになつて、わしは新田に言った。

わしから金を受け取りながら、ここがじいさんの家かいな、という顔で新田は車をとめた横の門がまえを見ている。決してちよつとこまい家ではない。残飯もいいのがふんだんに出る。

アシヤにイノシシが出たら、電話してんか。

わしは新田に出させた紙きれにこれも新田から借りたボールペンで電話番号を書いて渡した。

あんたの車で見に行く。

と言つてから、

いや、シシ狩りに行く。

と言いなおした。

それは面白ますな。

と五人の子持ちの若僧運転手がすぐ応じたのは、もちろん、冗談だと思ったからにちがいない。

## その二 K―通りのまっ白い卓子

ぼくは二十年来シャム双生児のようなこの街に住んでいる

(ペーター・シュナイダー)

しかし、犬はどうするんです、と新田がつまらぬことを言い出した。そもそもシシ狩りには犬がつきものである。何頭かの犬がシシを追いかけ、追いつめ、いつせいに取り囲んだところで火縄銃が火を噴く。新田がしたり顔につづけて言うのに坂口が早速、そうですがな、かんじんなもんは犬ですがな、と大きくうなづく。犬がいんことにはどうにもなりません。もちろん、坂口は何かと難くせをつけてシシ狩りをやめさせたいのだ。

犬はあんたらじゃ。

わしは二べもなく言つてやった。

犬はおらんでも、あんたら、勢子<sup>せこ</sup>がいる。あんたらが大イノシシを攻めたてる。攻めたてて、どこぞの社長はんの何号夫人のお屋敷の塀のきわに追いつめたところ……

おじいちゃん、射つ。

ミキが電報を打つように引きとつた。案外それでこのチビのオマセ、それこそ誰ぞの何号夫人のお

屋敷の庭で日なたぼっこして寝そべっている大イノシシ——大アシヤのイノシシに「キチガイオジヤン、ウツ、ニゲラレタシ」と電報を打ったかも知れないと、わしは一瞬奇妙なことを考えた。

それだけのやりとりが四人のあいだにあつたのは、新田の車が山の手のアシヤのお屋敷町めがけて上る急傾斜の坂道の途中でのことであつたが、いざ新田が子連れの大イノシシに出会つたという一角に着いてみると、チビのオマセの電報が効を奏したのか、そのあたりイノシシの影もかたちもない。そこはつい上が雑木林の山地だつたからまさにイノシシの出て来そうなところだつたが、いないのはいないのだから仕方がない。わしは一角に腰を下ろし、勢子どもをあちこち走らせてみたが、ついにあきらめて下知を下した。まあ、ひと休み、お茶でものむか。「者ども」とは下知のなかで言わなかつたが、そんな気持ではある。

山腹のお屋敷町からまた急傾斜の坂道を下つて「下界」に降りて、駅前近くの喫茶店へ行つた。顔なじみの小ぎれいなマダムがやっている喫茶店で、このマダムとは何年もまえにどこのホテルで一夜を明かしたことがあつたが、そのように記憶するが、まちがつているかも知れない。名前はキクと言つたかそれともアヤマだつたか。マダムはわしが火縄銃をかついで来たのを見て何か言いたさうな顔をしたが何も言わなかつた。あれは何も言うことがなかつたにちがいない。わしと新田はコーヒ、坂口はコーヒは体質に合わんというので紅茶。ミキはアイスクリーム。抹茶のアイスクリームがありますかと生意気なことを言つたが、そんなものはない。じゃあ、白いの。そのことば通り、白いのが出て来た。

勢子一同、何やらぐつたりとしているので、西宮の象の話をしてやった。べつにアシヤのイノシシに対抗する気持があつたわけではない。少しバカ話をやつて勢子に元気をつけてやろうとしただけのことだ。

大阪で万博をやつたころの話である。象の国タイから象が集団でゾロゾロやつて来た。万博の見世物にしたのである。貨物船に乗せて連れて来たのを、神戸の港に着いてから吹田の会場まで象使いが追い立てて歩かせた。国道やら何んやらのアスファルトの固い道路をえんえんと二日ばかりで歩かせられたのだから象にとつてはさぞかし辛かつたにちがいない。途中、アシヤ、西宮を通つて、武庫川の河原で象使いもろともその二十頭ばかりの象は野宿をした。

ほんまの話ですか、それ。

ほんまの話じゃ。

新田にわしはすぐそう応じたが、わしが自分で象の行列を見たわけではない。新田よりもつと年上のタクシー運転手がお客さん、ここらでわたし、子供のとき象歩いているのを見たことありまつせ、と言ひ出したのを聞いたのだ。車が駅近くのガード下に来たところであつた。象が通るといふ話は他の人は聞いてはりましたんやろけど、わたしは知らなんだ。自転車乗つてここらにやつて来たら、なんやケツタイなもんが見える。何んやと思つたら象や、象の行進や。あれ、ほんまにびっくりしました。子象まで連れていよつた。

万博で見世物になつていゝあいにだに子供が生まれていたのだ。それで子象を連れての行進になつていた。なかなか立派なものやつたやろ。大きいのが堂々と歩いて行きよる。そんなことありませんで

したな。運転手は反論した。万博のあいだ、象使いなんかずっと自炊していましたんやろ、汚ない大鍋なんかを両側に吊るしていよつて、見ばえは一向にしませんでしたで。なんでトラックで運びよらんかったんやろ。あのころの日本には、まだこんな大きいのが走つていよらんかったんやろか。運転手は横に並んだ長距離トラックの巨大で細長い車体を見ながら言った。

ガードの下までその見ばえが一向にしない行進が来たところで、折あしくガードの上を轟音をたてて列車が通りかかった。重い貨物列車である。子象は足がすくんで動けなくなった。横の親象が鼻で押しても、動かぬ。ああいうときはお客さん、どうするか判りますか。運転手が突然訊ねて来た。ちようど車も信号待ちでガード下でとまっていたのだ。判らんや、棒もつて来て叩くのか。ちがう、ちがう、水かけますのや。たちまち象使いたちは象の横にぶら下げたバケツにどこからか水入れて来て、子象のお尻にぶっかけ始めた。びつくりして子象は動き出す。

イノシシにも水かけてやりますのやな。

たいして面白くもなさそうにわしの象の行進の話を聞いていた坂口が口を出した。

そしたら、ろくに働きよらんアシヤのイノシシも働きよるかも知らん。ほんまに働きよるかも知らんや。

庭の芝生に寝そべつて日なたぼっこしているイノシシの姿がわしの眼にまたしても浮かんだ。

そんなら、また行くか。

わしは横にたてかけた火縄銃を持ちなおして立ち上った。

どこへ行きはりますのや。

と坂口が慌てて追いつがるように言った。

シシ狩りにまた行くのやがな。

また。

勢子どもがいつせいに声をあげた。ミキまでが不満そうにおじいちゃんを見た。

そして、実際にシシは——アシヤのイノシシは出て来たのである。さっきの一角とはちがつたが、その近く、やはり雑木林の山地にそのままつづくお屋敷町の一角、しゃれてはいるがいささかチャチでもある三角屋根の屋敷のコンクリートの塀のまえにヒョッコリ一頭が姿を現わした。予感があつてわしらはもう車をとめて歩き出したところであつたが、さあ、行くんじや、勢子ども、追いかけるんじや、追いつめるんじや。者ども、動かんとうしろからおまえらのお尻に水をかけるぞ。そう下知をわしは大音声でくだしたが、わが軟弱な勢子ども、九州の在所の山奥でいつもシシ狩りをやつていたというタクシー運転手の新田までふくめて一向に動こうとしない。一方、わが眼前のアシヤのイノシシは、そういうアシヤの勢子どもの不甲斐なさをとつくに計算に入れていたのか、まるでそこらあたりの散歩を楽しんでいるようにゆつくり悠然と歩く。かくなる上は、とわしは火縄銃をかまえた。

あ、おじいちゃん、かつこいい、猟師みたい。

とほんとうにミキが言ったかどうか記憶にないが、火縄銃の重み、ズッシリと肩に来たのにはたしかに記憶がある。かまえた以上、射たねばならぬ。

あ、おじいちゃん、射つ。

ミキが叫んだ。わしは射った。

たしかに火花が火繩銃のばか長い銃身の尖端で飛び散ったが、たしかにその記憶はあるが、同時に激痛が背中に走った。わしは射たれた。そう思ったとたんには確実に死んでいた。

\* \* \* \* \*

もう死んでしまっているの、どこへでも行ける、と思った。それでどンドン歩いて行った。路上に卓子と椅子を持ち出して張り出してつくったカフェでみんながしきりにコーヒを飲んでいる。それともビールかも知れない。こういうテーブルと椅子を歩道に持ち出してのカフェの張り出しは、このKー通りの名物だとは聞いていた。一度行ってみたいものだ、と思っていた。「壁」のむこうには、あまりそういう名物はなかったからだ。まさかそれだけのことで「壁」を越えようとしたのではないが、それにしてもいつか写真で見えたこのKー通りのこのさま、それは眼に焼きついている。

明るい真夏の陽光があたり一面を照らしている。全体がおかげでまっ白に輝く。輝くなかで、みんながコーヒを飲み、ビールを飲む。Kー通りの卓子のまっ白、その上のコーヒ茶碗のまっ白、コーヒ茶碗を真赤なルージュの唇の口にやる女性のワンピースのまっ白。べつに若くもないし、まして美女でもないが、そのまっ白はあざやかである。眼にチカチカする。死んだら、世界はまっ暗闇であるはずなのに、このまっ白な世界の輝きはどういうことになっておるのか。わたしはたしかに「壁」を越えようとして背後から射たれて、それでたしかに死んだのだが、その痛みは背中にまだ残っているのだが。――

「壁」を越えようとは以前から思っていた。いや、これは、「壁」のむこうに住んでいる人間なら、一度は夢みてみることはないか。もちろん、できもしないことだと一瞬の夢のあとで考えを棄てる。「壁」のそばの建物から穴を掘って「壁」のむこう側にまで地下道をつくって越える。道に建物の上方の窓からお手製の小さな飛行機ならぬ飛行器で飛んで越える。あるいは、逆に車の座席の下に身をひそませて検問所の検査をなんとか通過、うまく逃げるのもいた。しかし、これは成功したのは最初の一回きりで、あとの連中はみんなつかまつている。それよりはもつと単純に頑丈なトラック一台を調達、そいつで検問所のジグザグ道を全速力で突き切ったやつがいた。この単純素朴なやり方、一回は効を奏したからえらいものだ。うしろからは、もちろん、射たれたらしいが、とにかく無事に逃げおおせて「壁」のこちら側に車もろとも飛び込むことができた。

こういう危なげで荒っぽい方法に対して、同じ車を使ってももつと賢くやつてのけたのもいた。ここに駐留している外国軍隊の人間は、「壁」のこちら側、あちら側、どちらにもいる軍隊の人間でも、軍服を着ていればあちら側からこちら側へ、こちら側からあちら側へ自由に「壁」を越えて行き来できる。世の中まさにチエ者はいるので、どこから手に入れたものか、北方、クマの国の軍隊の軍服を着て車に乗り、検問には敬礼で応じてまんまと「壁」の外に出てしまった。

では、わたしはどうしたのか。わたしには飛行器もなければ頑丈なトラックもなければ北方、クマの国の軍服もない。それでわたしはどうすることにしたのかと言うと、これは簡単な話である。奇蹟を信じたことなのである。だいたいがこれまで述べて来たわたしの「壁」を越える話、あるいは、「壁」を飛ぶ話、すべて奇蹟のような話である。どういう方法を使ったところで、結末が無事に「壁」

のむこう側にたどり着いてたとすれば、奇蹟が起こっていたことになる。さつきも言ったが、「壁」のこちら側——いや、もうわたしはこちら側にいるので話はあちら側で、ということになるが、そのあちら側では、誰でも一度は「壁」を越えてむこう側へ行ってみたくなるものだ。しかし、それはすぐできもしない話だと考えるのをやめてしまうのは、それができれば奇蹟みたいなものだと思います。もうからだ。つまり、奇蹟なんか世の中には存在しない——そういうことになる。奇蹟が起こるのを信じて、もちろん、出かけて行った人間もいたが、射たれて、死んで、おかげで奇蹟は成立しなくて、うまく行って「壁」のむこう側に並ぶ十字架になつて終る——まあ、そういう話だ。そういう話をわたしは誰かから聞いていた。いや、あれはささやかれていた、と言つたほうがよいだろう。十字架は「壁」にそつてずつといくつも並んでいる。そうささやかき声はつづけている。

とすると、結局のところ、「壁」を越えようとすれば、奇蹟しかない。そういうことになる。そして、そいつが奇蹟なら、奇蹟は方法のいかんによつて左右されるはずがない。左右されるほどチャチなものなら、そんなものは奇蹟でないのだ。

で、いつそ、正攻法で行くことにした。ハシゴをかついで持つて行くことにしたのである。生来運動神経のにぶいわたしのことだ、「壁」にむかつてジャンプすることも、あのコンクリートの「壁」をよじ登る元氣も技術もない。ハシゴをかけるのにこしたことはない。降りるときも同じハシゴを「壁」の上から引き上げて使う。「壁」の上にはぶあついマットレスを敷いて、「壁」の上に埋め込んでいる釘やらガラス片やら物騒なものを踏み抜く被害を避ける。反対側にハシゴを立ててそれでそろりと降りて地上に立つのだが、それで「壁」は終りはしない。そこから五十メートルほどの幅の

まさに無人境ノウマンズランドがあつて、そこをハシゴと踏み抜き被害防止用のぶあつくはあるが小さく切つたマットレスをかついで走つて、いや、そこも奇蹟を信じてゆつくり歩いて（昔はよくそこには地雷が埋めてあると言われたものだ、どれほどの昔かよく判らぬが。すくなくとも都会のまんなかのその無人境ノウマンズランドには地雷など埋めていない。それもささやき声が教えてくれたことだ）、もうひとつ、ひと並びの「壁」にたどり着く。いわば、こちらの「壁」のほうが本格、本式の「壁」といふべきものであつて、それとと言うのも、そのむこうが、つまり、こちら側、いや、そのときにはあちら側であつたからだ。その本格、本式の「壁」にやおらハシゴをかけて（おちつけ、おちつけ、奇蹟を信じるんだ、の声。ささやき声）、ゆつくりハシゴを登つて、マットレスを釘、ガラス破片の上に置いて、さあ、あちらへむかつて跳び上がる。いや、またハシゴを悠然とこちら側、いや、あちら側から引き上げて、そいつをあちら側、いやこちら側へかけて、それから降りる。おもむろに降りる。

奇蹟は実際起こつたのだ。監視員が全員ヒルネをきめ込んでいたのか、神様が全員にネムリ薬を一服盛つていてくれたのか、それともこの世の中に脱走者監視のつまらぬ仕事よりもつと途方もなく面白い、楽しい見世物スペクタクルがあつたのか、奇蹟はほんとうに起こつたのだ。

ただし、そこまで。

あちら側に、いや、こちら側にハシゴを一步降りかけたときに、鋭くホイッスルが背後で鳴りひびいて、勢子せこだ、勢子が来たのだと直感したのと轟音一発、背中に激痛が走つたのとは同時であつた。ああ、わたしは今死んで行く、と思つたが、しかし、それでも何か幸福な気持でいられたのは、死ぬにせよ何んにせよ、「壁」からあちら側、いや、こちら側へわたしが転落して行つたのが判つたからだ。

そう考えれば、とにかくそれで奇蹟は曲りなりにも成立したことになる。

しかし「壁」にそつてたち並ぶ十字架にはなりたくない。それでわたしは地上に死んで転落するとすぐにK―通りめがけて歩き始めた。さして理由があつたわけでもない。K―通りと言えは、あちら側、いや、こちら側隨一の商店が並びカフェが歩道にまつ白い卓子を出す大通りではないか。そこへ行かぬ術はない。まさにそこにこそ、こちら側、いや、今やあちら側になつた「壁」のその側になつたものがあるのだから。

わたしはまつ白い卓子のひとつへ行つた。とにかくコーヒーを飲むべし。で、飲んだ。あちら側よりたしかにうまいと思つたが、それほどでもない。みんながじろじろわたしを見ている——と思つたが、そんなことはなかつた。つい横の卓子の、わたしと同年輩の三十がらみの男が本を読んでいる。足もとに大きな犬がいて、そいつは大きくアクビをする。反対側の横の卓子では、若い母親が懸命にバギーに乗せた赤ん坊に何か話しかけている。おどろいたことに、この赤ん坊の顔は黒い。こちらの側の駐留軍としてやつて来た国の兵士の黒いのが赤ん坊の父親であるのか。赤ん坊の背後の卓子についているのは、さらに若いカプルだ。二人は何も言わない。言う必要も今はまだないだろう。ただ、黙つて坐つて、ここ名物の（これは、こちら側もあちら側も同じだ）「白ビール」を飲んでゐる。その横の卓子は——もうやめよう、要するに、世界はみんな自分のことに忙しいのだ。「壁」があろうとなかろうと、そこを死に物狂いで、いや、死んで越えて来る人間がいようといまいと、そんなことは知つたことではない。わたしは立ち上つた。さびしくなつたというのでも、今さら人間の不条理に絶望したわけでもない。しかし、立ち上つた。世界がみんな忙しければ、立ち上るより仕方がないで

はないか。

立ち上ると、目ざとく見つけたウエイトレスが勘定をとりやつて来た。そのときになつてわたしははじめて自分が金をもつていないのに気がついた。あちら側の金がちり側で通用しないことは判つていた。それであちら側の金はビタ一文もつて来なかつたし、こちら側の金もビタ一文もつていない。あちら側に行けば、いや、こちら側に来れば、なんとかなる。そう思つていたことはたしかだが、そのとき、わたしには、こちら側が何ごとがあるうと、起ころうとつねにあたたかく赤ん坊の自分を抱きかかえてくれる母親のごとく思つていたのか。しかし、とにかく、もはや死んだ人間は金などもたないものだ。わたしは言つた。

「壁」を越えてやつて来た。

壁？

ウエイトレスはケゲンな顔をした。それからのウヨ曲折については話を省く。要するに、押し問答の末彼女が引つ込み、べつの年配のウエイトレスが出て来て、これもまた押し問答で引つ込み、主人が出て来てひとめ、ふたもめしているあいだに、横の卓子で本を読んでいたわたしと同年輩の男、じゃあ、わたしが出してあげるよ、と小銭を数えて肥つちよ、あから顔の主人にさし出した。

好意は素直に受けるものだ。また、受けるより、この場合、仕方がない。わたしは礼を言つたが、わたしをおどろかせたのは彼がぶつきらばうに言つてよこした次のことばだ。

「壁」なんかないよ。

もうないよ、と言つたのか、まだないよ、と言つたのか、そこはよく記憶していない。何を言いや

がると思いながらあらためて立ち上つてそのまま黙つて歩きだしたが、男のことはやはり気になつてふり返ると、彼はわたしのうしろにピッタリ寄りそうようにしてついて来ていた。巨大な犬がこれもまたわたしと彼双方に寄りそうようにしてついて来ている。

無言のうち近くに近くに駐車してあつた彼の車に乗つた。何んという車か知らないが、とにかく古ぼけた車だ。それでもまちがいなく走つた。まちがいなく走つた先は、言うまでもなく「壁」だ。わたしが射たれて、死んだ「壁」である。

と思つたが、「壁」はなかつた。こちら側からあちら側が突き抜けて見えた。あちら側にもこちら側と同じように決してみごとと言えない陰気なアパート群がたち並んでいてまさに区別はつかない。

「壁」なんかないよ。

男はアゴをしゃくつて車の前方に見えるあちら側——こちら側と寸分變りのない、こちら側がそのままつづいて行くあちら側を指してみせた。

夢を見ている気がして来た。男のしゃくり上げるアゴに生えた、いや、剃り残したヒゲを呆然としばらく見ていたのは、その貧弱なヒゲだけが奇妙に現実リアルであつたからだ。

「壁」なんかないよ。

と彼はくり返したが、またしてもわたしは、もう、なのか、まだ、なのか、聞きもらした。

その三 グレート・ホール 大会場の円蓋ドームの雨

あめ〔雨〕 広い範囲にわたり、空から続いて落ちてくる水滴

〔三省堂「新明解国語辞典」〕

死んだ、というのは身軽なことだ。重い肉体がないのだから、タマシイはどこにでも飛んで行ける。もちろん、見た眼には、まだ肉体は残っている。だから、さつきも歩道のまっ白い卓子のカフェで会った男の車にも乗った。オヤ、あんた、からだがないじゃないか、と彼もべつに言わなかった。

どこへ行くかね、これから。

男はわたしの顔を見た。

まだ時間がある。近くへなら送って行つてあげてもよい。

男は腕をあげて手首を見た。腕時計を見るつもりだったにちがいがなかったが、時計はなかった。キラリと光る金属製の腕環をしていた。こいつはゲイかも知れないと警戒する気になった。用心するにしくはなし。しかし、すぐ、相手がゲイであろうとなかろうと、わたしには相手と何する肉体はないのだと気がついた。わたしはすでに死んでいる。こわいことは何もないではないか。どこへでも行ける。どこへ行つてもよい。これはすばらしいことだ。すばらしいことではないか。

じゃあ、とにかく街をひとまわりしてみたい。あんたに時間があるのならね。

ある。今四時だが七時までではね。三時間ある。七時半には、アネットのアパートへ行けばよい。七時半に交代する約束をしている。

男はわたしの背後をうかがい見るような眼をして言った。ふり返ってみると、時計屋があった。シヨウ・ウインドにいろんな時計が並んでいる。大きいのも小さいのも、円いのも四角いのもあった。そして、それぞれがてんでんばらばらに思い思いの時刻を指している。たしかに四時もあったが、十二時半、一時四十五分、三時二十三分、五時、八時四十一分、四時は二つあった。あとは、ひとつずつ。してみると、多数決で。この男、今の時刻を決めたのか。

何んの交代をするのかね。衛兵の交代か。

わたしは冗談口を叩いた。

「壁」のむこうの大通りでは、いつもそういう儀式があった。反ファシズムのたたかいに倒れた兵士、市民のために永遠に火が燃えていた。そういう火のある殿堂があつて、その石造の冷めたい殿堂の入口には、兵士が剣つきの銃を立てて両側に二人、春うららの日、風さわやかな初夏、雨の日、風の午後、夏の夜、いつ行つても立っていた。ニコリともしない。それどころか、まばたきもしない。いや、あれは一時間に何回かしていることになつていたのか。

一時間ごとに、毎時、交代があつた。衛兵はただ立っただけでもものものしかつたが、これはそのものしいのが、そのけそこのけ、とばかりにして動くのである。殿堂のつい横の建物から剣つきの銃を肩にした新しいのが二人、まっすぐに伸ばした脚を大きくあげて軍靴を歩道の敷石に叩きつけ

るようにして歩く。十五メートルほどの短い距離だが、行く手を妨げるものあらば突き飛ばしてでも進撃する、そのけはい、気迫はすさまじかった。実際カメラをかまえた観光客が軍靴で蹴飛ばされてよろけて、そのはずみでいかにも高価なものらしく見えたカメラを敷石に落とすのを見たことがある。観光客は、もちろん、「壁」のむこう側からこわごわやつて来た観光客だ。カメラは日本製だった。「壁」のむこう側から来た観光客のカメラはたいいてい日本製だ。ニコン、キヤノン。あと、何があつたつけ。

観光客を蹴飛ばし、カメラを破壊したあと、新しい衛兵は永遠の火の燃える石造の殿堂のまえにめでたく着いて、そこで一時間立ちつづけていた古いのと交代。古いのがまた脚を高くあげ、すべてを蹴飛ばして歩く。

アネットと交代して、赤ん坊の世話をするんだよ。彼女は七時半から働きに行く。それまでは赤ん坊の世話は彼女がしている。あとは、夜十時まではおれだ。十時に彼女は帰つて来る。赤ん坊は二歳女の子だ。

あんたの子供かね。

ちがう。

男は大きくかぶりをふった。

アネットのだ。

じゃあ、あんたは何んだ。

アネットの友人だよ。いっしょに住んでいたこともある。赤ん坊はそのとき生まれただ。

じゃあ、赤ん坊の父親はあんたじゃないか。  
ちがう。

男はまた大きくかぶりをふる。

父親はべつの男だ。おれの髪の毛は金髪だろ。もつともだいぶ薄くなつて来ているが、アネッテも金髪。赤ん坊の髪の毛は黒い。これで判るだろ。

何が判るといふのか。わたしは出まかせを口に出した。

彼女の父親は日本人か。

ちがう。

男はまた大きくかぶりをふる。これで三度目だ。

コロンビア人だよ、南米の……彼はもうコロンビアに帰った。

じゃあ……

とわたしは言った。これもこれで三度目だ。

あんたがアネッテのところに戻つて、赤ん坊と母親といつしよに暮らせよ。

(これで一件落着。めでたし、めでたし)ではないかと、これは心のなかで言った。

そうはいかないんだね、そんなことをすれば、ソフィが怒る。

突然出て来たもうひとりの女性の名前のまえで、わたしはまた、じゃあ……を言った。そうするより他にない。

じゃあ、アネッテのところへはもう行かなければよい。

しかし、おれは赤ん坊が好きなんだ。

何んという名前かね。

マーガレット。

アネットにソフィにマーガレットか。忙しい男である。アネットは看護婦でソフィはまだ大学の学生で（楔形文字の研究をしているとか言った。なんで、そんなものを勉強するのかとわたしが言うとおれも同意見だよと男は絶望したような声を出した。おおかたベッドの上でも、彼は彼女の楔形文字に悩まされているにちがいない。彼女は彼の裸かの胸に楔形文字で愛のことばを書く。それとも離別のことばをすでに書いているのではないか）、マーガレットはただの赤ん坊——という三人それぞれ の氏素姓のことはさらにしゃべっているうちに判つて来たことであつたが。

じゃあ、あんたは何んだね。

絵描きだ。

彼はすぐ言つた。

売れるのかね。

もちろん、わたしは彼の絵のことを言っているのだ。

売れんね。

彼はニコリともしないで即座に確信を込めて言つた。まばたきひとつしない感じである。やはり、こいつは衛兵だ。絵描きと言うより衛兵である。わたしはとつきにそう決めた。じゃあ……

（衛兵よ、行くべし。すべてを突き飛ばし、蹴飛ばしてでも行くべし）

つづきは製品版でお読みください。